

学会だより

World Space Congress Exhibition

去る10月10日～19日、「World Space Congress」が米国テキサス州ヒューストンで開催された。WSC は IAF、COPSAR、IAF、IAA、IISL という定期的に行われている ASSEMBLY が一同に統合される「10年に1度」の宇宙関連最大のイベントである。

そしてこの国際会議に併設した「The World Space Congress Exhibition」なる展示会も大々的に開催され、全世界の宇宙関連の公的研究機関、私的研究機関、大学、ビジネス従事者が George R. Brown Convention Center に集結した。CRL も最新の宇宙関連技術を中心にブース展示を行った。

ビッグサイト並の規模を誇る George R. Brown Convention Center は、黒と赤を貴重としたシックなデザインにまとめられ、アメリカ合衆国、南米、ヨーロッパ、アジアの国々より国際色豊かなブースが展開された。日本



右: 著者 大野由樹子 (通信総研)

左: 宇宙飛行士の若田光一氏



NASDA, ISAS, NAL 連合
「Jpapan ブース」



CRL ブース

からは CRL の他に、来年に統合を控えた NASDA・ISAS・NAL 連合の「Japan ブース」が参加した。「宇宙3機関の統合」を「国内に先立って大々的に前倒しアピールをすることになり、非常に効果的 PR になっていたと思う。日本庭園を思わせるような「和」のイメージを前面に打ち出しつつ、わが国の宇宙最前線を見せたブースのプレゼンテーションも素晴らしく、「Japan ブース」は会場の話題を集めていた。

CRL は今回単独で参加。(海外展示会への参加は初!)メタリックで先鋭的なイメージのブースを出展した。展示したものは次の7点で

成層圏実験用中継ポッド、 8の字衛星軌道モデル、 ETS- 折畳式アンテナ、 ギガビット用 ATM ボード、 ギガビット用 LSI チップ、 マイクロサット MCM、 宇宙作業用モジュール型ロボット、 ウエアラブルアンテナ・・・と多彩な顔ぶれをそろえた。無線通信部門より鈴木龍



太郎グループリーダ(先進衛星技術実証グループ)、新垣吉也主任研究員(無線イノベーションシステムグループ)の2名の研究員が説明担当として常時ブースにはりついた。

鈴木 G リーダはブース全体の統括役として、新垣主任研は成層圏実験用ポッドの主担当として、来場者への説明や質問の受け答えに追われていた。来場者は、研究機関、大学、メーカーなど100%が宇宙の専門家で、将来のAllianceへとつなげる目的を持っている人が多いためか、熱心かつ非常に突っ込んだ質問が飛び交う。鈴木、新垣両名の説明にも自然と力がいっていたようである。また、当然のことながら出展者間での情報交換もさかんで、研究者やメーカー社員が、互いのブースの積極的に行き来しつつ情報収集やディスカッションをする光景が多く見られた。



ETS-VIII 用の折り畳み型地球局を説明



NASA のブース



NASA のブース

特筆すべきはやはりご当地『NASAブース』であろう。当然だが圧倒的なボリュームと存在感を誇り、展示・デモ・体験コーナー・シアター上映など、テーマパークのようなNASAの世界がそのまま再現されていた。そして来場者を発見すると、ブースアテンドのスタッフがすかさず『何かご質問はありますか？何でも

聞いてください』と寄ってくる。大規模なブースであるにも関わらず、非常に細やかな対応なのに驚かされる。NASAのスペースセンターでは Interpreter(翻訳者)と呼ばれる説明員が見学者対応をするということを聞いたことがある。サポーターである国民へわかりやすく説明する義務がある・・という方針が隅々まで浸透し、こういった外部展示会でも生かされているのではないだろうか？週末には地元NASAファンが(大人も子供も)つめかけ一日中賑わいをみせていた。

展示会3日目の16日(土)には、宇宙飛行士の若田光一氏がCRLブースを訪れ、CRLの最新研究成果を丁寧に見学していった。特に宇宙作業ロボットのアームに興味を示したようで、説明に熱心に耳を傾けていた。周囲にいた人々は、若田さんのきさくで謙虚な人柄を垣間見ることができたはずだ。

今回の展示会を通して、多くの方々に「Japan」の宇宙分野における存在をアピールすることが出来、日本にとって実り多いものになったと確信している。

